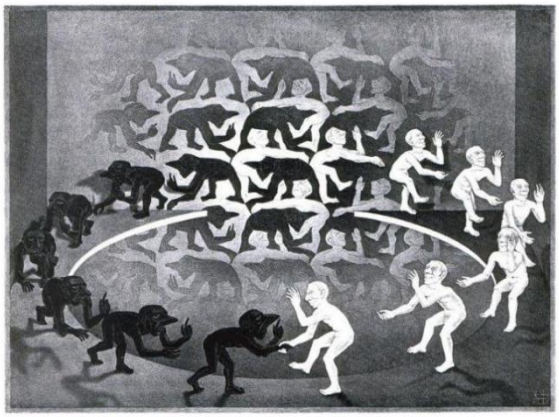
ちょっとそこまで
～お散歩日和（名言編）～

ダイヤモンドの行商人がやってきて、
このダイヤモンドは永遠の輝きをどうのこうの言うとるけど、
せいぜい百年しか生きられん人間に、永遠の輝きを売りつけてどうするんじゃ。
俺らが欲しいのは今だけです。　　…… 甲本ヒロト（ブルーハーツ）



エッシャーの作品に「出会い」というのがあります。

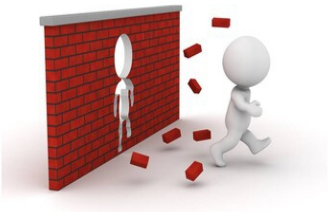
まず１枚の絵があって、向かって左を向いている白い人物と、右を向いている黒い人物がジグソーパズルのようにはめ込まれ平面を埋め尽くしています。当然ながら、この絵の中での２人は隣どうしピッタリと接し合ってはいても、握手できるような構図にはなっていません。というより、この平面上のあらゆる場所で、白黒２つのキャラはすれ違いをくり返しており、そのすれ違いは、どこまでも続いているように見えます。

しかし、その２つのキャラが突然、２次元世界から３次元へと移行し始め、最後には白い人物と黒い人物の２人を握手させるのですから恐れ入ります。作品では、初めの平面世界は、画面の奥の方に置かれており、その前に丸く繰り抜かれた池みたいのがあって、白黒それぞれがその円周を回るようにして移動し画面の一番手前のところで、「出会い」を演出されているのです。

しかも、黒い人物は妖怪のようでもあります。見ようによっては、人間のダークな部分を映し出しているとも言え、そこでの握手が何を意味しているか、深く考えさせられます。こうした出会いの対比が生み出す寓意は、エッシャーの魔力であり、大きな魅力と言えるでしょう。

いきなり訳のわからない話で始まり恐縮です。なぜこんなことを書いたのかと言いますと、私自身のの経験から、世の中には変わるものも多いけれど、その一方、変わらないものも少なくないとの実感をもっているからです。

そこで、その変わらないものと思うものの中から「自ら枠を作らない」という点を取り上げてみます。



枠は作るものではなく、結果としてできるものです。自分で自分の容量や可能性・将来像を勝手に決めると、それ以上は自分の能力を発揮できません。高い目標を先ず設定して、それを達成するために、自分にできる全ての努力をそこに集中することが肝要です。

人の人生は、自分で制限や限界を作ってしまえば、その枠の中で生きていくことは、比較的簡単なことであり、どうしても逃げのスタンスに陥りがちです。言い訳を用意できると言えば分かりやすいでしょうか。「自分は〇〇な人間だから。」「〇〇な性格だから。」「不器用で〇〇しかできないから。」・・・

もちろん、それでも十分、満足して生きてはいけるとは思いますが、少なくとも私好みではありません。もっと自分の幅を広げることができそうな気がしますし、自分の人生をよりドラマティックに自ら演出したいという欲望にも満ちているからです。

その意味からも、「出会い」を大切にする人間であり続けたいとの願いがあります。エッシャーの「出

会い」を持ち出した理由がここにあります。

人生は出会いに尽きます。何故なら、「人生の扉は他人が開く」からです。どの出会いが自分にとって大切かは、その時は分かりません。だからこそ、一つ一つの出会いに真摯に向き合うことが大切です。出会いは自分を成長させ、そして、人生を豊かにしてくれます。ましてや出会いに「運命的な出会い」などというものはありません。その後、お互いが相手に信頼と敬意をもって接し続ける、長い日々の営みの積み重ねの中で「運命的な出会い」へと昇華していくのです。絆を深め、その結果として「掛け替えのない友や恩師」が作られていくのです。

もちろん、その「出会い」とは人との邂逅だけを意味していません。これに関連して、とても有名な逸話があります。

スティーブ・ジョブズの大学での講演「connecting the dots」、すなわち「点と点をつなぐ」という話です。彼は、大学を半年で退学、その後、モグリで聴講したのがカリグラフィー、装飾文字の一種ですが、彼はこれをほぼマスターしました。その１０年後、「マッキントッシュ」を開発する時、カリグラフィーの技術が取り込まれ、完成したのが美しいフォント機能を備えた世界初のＰＣでした。

「カリグラフィーという学問の点」と「マッキントッシュＰＣという点」が繋がったのです。ジョブズが回顧します。

「大学にいた頃は点と点を先まで読んで繋げてみることは考えてもみなかった。しかし、１０年後振り返ってみると、あの点とあの点が結び付いたと、はっきり分かった。」

学問とはそういうものでしょう。学んでいる時は、全てがばらばらでどういう意味があるのか、何の役に立つのか見えてきません。でも、将来それが何らかの形で必ず繋がっていくのです。

そうした点が繋がって、いずれは確かな道となることを信じて、「自らに枠を作らない」ように生きていきたいと思うのです。

このことは、哲学者九鬼周造が「遇(あ)うて空しく過ぐる勿（なか）れ」という有名な言葉を残していますが、同義でしょう。これは、同じく哲学者の鷲田修一氏の解説によると、

「偶然とは、偶々（たまたま）「あった」が「ない」こともありえたということ。この〈私〉も両親の偶々の結ばれから生まれた。そのかぎりで〈私〉が今ここにこうしてあることに最終的な根拠はない。が、この偶然は人生を最後まで制約する。そう、偶然は必然へと裏返る。〈私〉の存在が意味をもつのは、この裏返りに孕(はら)まれた可能性を生き抜く時だけだ。」

となります。「偶然は必然へと裏返る」とは実に小気味よい言葉です。どこかで蘊蓄を垂れるのに絶好なネタになりそうな気がします。

最後に、今から１０年ほど前に大ヒットした韓国ドラマ「学校２０１３」の中で何度も挿入されたことで一気に有名になった詩を紹介します。それにより、邦題も「ゆれながら咲く花」になりました。

ゆれずに咲く花がどこにあろうか
この世のどんな美しい花も
すべてゆれながら咲いたのだ
ゆれながら真っ直ぐに茎を伸ばしたのだ
ゆれずに進む愛がどこにあろうか

濡れずに咲く花がどこにあろうか
この世のどんな輝く花も
すべて濡れながら咲いたのだ
雨風にさらされながらも花は開いたのだ
濡れずに歩む人生がどこにあろうか

（都 鍾煥：ト・ジョンファン）

僕はそう　小さなツバメ
たどり着いた街で触れた
楽しそうな人の声　悲しみにくれる仲間の声

みんなそれぞれ違う暮らしの形
守りたくて気付かないうちに
傷付け合ってしまうのはなぜ
同じ空の下で

ＮＨＫの子供向けＳＤＧｓ教育番組のテーマソング「ツバメ」です。今や飛ぶ鳥を落とす勢いの「YOASOBI」が歌っています。これから本格的に運動会シーズンを迎えますが、あちこちの学校で、このダンスバージョンが披露されることでしょう。ＮＨＫにしてみれば、まさに「パプリカ」の夢よもう一度といったところかもしれません。

さて、今回の話題は、そのツバメを取り上げたいと思います。

もっと大勢の情報が集まればもっと多く見付かるに違いありません。私の狭い行動範囲でも２か所、ツバメの巣を見付けています。

まず１か所目は大増寺のすぐ東側にある住宅車庫にあります。とても目立つので、前を歩いていてもすぐに気付きました。が、巣が空っぽだったので、以前のものなのかと不安になりつつ周囲を見回したところ、ちょうど前の電線の高い位置に止まっていました。壊れてはいますが、もう１つ巣があるので、毎年来ているようです。

もう１か所はそのまま豊島園通りまで足を延ばしますが、マルエツ田柄店の職員出入り口にあります。こちらはよほど運が良くなければ見付けにくい気がします。５月下旬に、本当にたまたま親鳥が目の前を横切ったので探し当てることができました。

ところで、このツバメが出てくる物語に、藤沢修平の「玄鳥」があります。私は名作だと思いますが、興味があったら是非一読をお薦めします。まあ、「玄鳥」自体がツバメのことですから当然なんですけど、そういう突っ込みは脇に置いて、この物語の主人公は「路」という名の女性です。ストーリーは詳しく申しませんが、この路の夫である末次仲次郎が、長屋門にできたツバメの巣を取り壊させるシーンが出てきます。その門をくぐって客が訪れたとき、とりわけ上役などが訪ねて来たときに粗相をすると大変だから、というのが理由です。いかにもありがちな正論風の屁理屈ですよね。結局、まだ巣立ちもしない子ツバメもろとも巣を壊させたのですから、末次仲次郎がどういう人物なのかを象徴するようなエピソードです。

どうしてこんなどうでも良い話をし始めたかと言うと、私の中では、このツバメ繋がりで、まだすっきりしていない出来事があるのです。実は、光が丘公園芝生広場の四阿（あずまや）に巣を作っていたイワツバメのことです。今もそこには「ツバメの巣に注意」のプレートが何枚も残っています。

何がすっきりしていないのかと言うと、その昔、全校遠足で子供たちを芝生広場に引率して行ったときのことです。その場所に全員集合させて、これからのスケジュールや諸注意をしていたときに、ものすごい剣幕でいきなり男性に怒鳴り込まれたことがありました。

「上にツバメの巣があるのが分からないのか。怯えて近付かなくなっているじゃないか。うるさい！」

そのときは、何となく子育て真っ最中の動物たちに申し訳ないことをしたという気持ちが先行し、

「ごめんなさい、今度の集合場所はもう少し離れた場所にします。」

と言って、その場を収めました。

ところが、それから数日もしないうちに、その四阿に散歩がてら立ち寄ると、たくさんあったツベメの巣が一斉に撤去されているではありませんか。とにかく驚きました。どういうことなのか、さっぱり分かりませんが、その後もイワツバメたちが帰って来ないところを見ると、おそらく、ツバメの巣が邪魔だと思う人間もいて、それが公園事務所に訴えたのでしょう。

しかし、私がすっきりしないのは、そのことではありません。私を怒鳴りつけたあの男性のことです。どうして、こんなひどい所業、まさに末次仲次郎そのものの振る舞いに対して、何もせず見過ごすままにしていたのでしょうか。私たちを震撼させた、あの咆哮のエネルギーは一体どこに消えたのでしょうか。そのことが今もまだもやもやしているのです。そして、今も虚しく残されている「ツバメの巣に注意」のプレートを、彼はどんな思いで見ているのでしょうか。気になって仕方がありません。

ちなみに、ツバメとイワツバメの見分け方は簡単です。ツバメはのどが赤色をしているのに対し、イワツバメののどは白色をしているからです。ついでに言えば、もう１つ、尾羽にも明確な違いがあります。ツバメの尾羽が長いのに対し、イワツバメは短くなります。

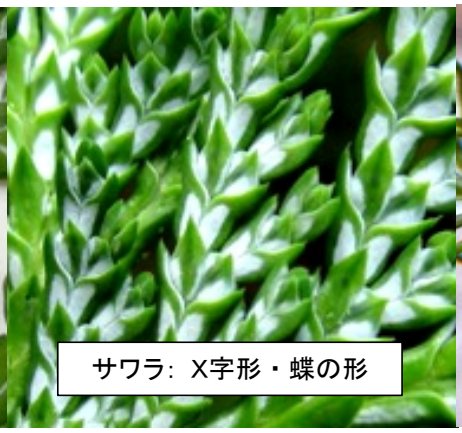
最後に、森昌子の「越冬ツバメ」は無類の名曲だと思います。その中で、「♪ヒュールリー　ヒュールリーララー」の一節は、演歌の神髄、物悲しいメロディとうまく調和して心に沁みてきます。これは、前後の歌詞からツバメの啼き声として歌われていますが、残念ながらツバメはそんな声ではありません。恐らく冬の虎落笛の寂しさをも表現しようとしているのでしょう。実際の声はジクジクピーピー、うるさいほどです。我が家の軒先に巣作りでもされたら、真っ先に壊してしまいそうです。

ちょっとそこまで
～お散歩日和（植物編）～

「魚へんに春」と書いて「鰆（サワラ）」なら、今日ここに紹介する樹木サワラは「木へんに春」と書くのかと思いきや、「椿」ではツバキになってしまいます。誰かが、「文化が成熟するとは、多様性を許容するカバリッジ（カバー率：あることが及ぶ範囲）が拡大するということである。」と定義付けていましたが、その意味で、こういう統一感のなさは文化の成熟度の高さの裏返しとも言えるでしょう。

当団地の針葉樹と言えば、光が丘第十一保育園前の駐車場を囲むカイヅカイブキと、５号棟南の通路出入り口のプランターにささやかに植えられたコニファーしか思い浮かびませんから貴重な存在です。と言っても、植栽箇所は、正確には団地敷地内ではありません。８・９号棟間の通路の、銀杏通り側入り口に２本立っています。植栽当初はほとんど同じ姿をしていたはずですが、現在は南側の樹勢に衰えを感じます。特にその枝先の縮れ具合の様子から、サワラではなくヒノキかと思ったほどです。日当たりとか栄養状況とか水はけとか、何らかの環境が影響しているのでしょうが、原因は分かりません。

改めて、ヒノキとサワラの違い、見分け方について触れておきましょう。最も簡便な方法は葉裏の白い気孔帯（気孔腺）の模様を見れば一目瞭然です。ついでに、同じヒノキの仲間であるアスナロ（ヒバ）と３者を並べて比較してみます。



針葉樹の枝の裏面には、 水分を蒸散させたり、ガス交換する気孔帯があり、 白いワックスがついています。ヒノキの気孔帯は「Ｙ字形」だと言われますが、どうでしょうか。それに対してサワラは、「Ｙ」に対して「Ｘ字形」だと言われていますが、当団地に関しては、「蝶の形」と表現した方が良いように思います。アスナロ（ヒバ）は「小」の字形と言えるでしょう。

まず、気孔の役割を復習してみます。気孔は植物におけるガス交換の場所です。体内からは気孔を通して外気中へ水分を蒸散します。従って、植物の水分バランスは気孔の開口度によって調節されていることになります。また、気孔からはCO_2が流入して光合成に使われ、光合成の結果生じたO_2がやはり放出されます。以上のような気孔の役割を考えると、ここがワックスで覆われているということは、気孔腔が塞栓されているわけで、蒸散量が抑えられ乾燥条件下などでの水分の消費量を抑えられるということが一番考えられる利点ということになります。針葉樹の多くが冬でも葉を枯らさずにいられる、大きな理由と言えるでしょう。

これについては、小学校６年生理科で光合成の学習時に顕微鏡観察します。使用する植物は、表皮を薄く剥がしやすいことからムラサキツユクサが多いですが、ツユクサ、ムラサキゴテンの他、ネギやキャベツなど身近な野菜類もプレパラートを作成しやすい植物です。セメダインや水絆創膏、マニキュアなどを使ったレプリカ法を用いると、さらに広範な植物の気孔観察を楽しめます。

さて、サワラの名前の由来ですが、柔らかいことを意味する「さわらぎ」の略です。または、「さっぱりした（さはらか）」という言葉からきています。これは、成長が早いので、ヒノキと比べて柔らかい木質で、表面にも目立つような光沢はなく、外見的にも香りの意味でも、さっぱりとした癖のない印象を受ける木材だからです。したがって、建築用資材として、構造材には不向きとされています。

その一方、谷や川沿いなどに生育することもあって水に強く香りもほとんどないため、お櫃（ひつ）などの生活用品に利用されます。漢字に「椹（さわら）」を当てはめていますが、つくりの「甚」は、竈（かまど）に乗った甑（こしき）の図から生まれた象形文字です。その後、この甑が蒸篭（せいろ）へと移り変わったことから、その材料として使用されたサワラに用いたのではないかと推察します。

ついでに触れると、ヒノキは、古代に木を擦り合わせて火起こしに使われていたため、「火の木」に由来しています。漢字の「檜（ひのき）」ですが、このつくりの「會」も、「甚」同様に、竈（かまど）の上にのった甑（こしき）にフタをした象形文字です。土器の甑とフタが、ぴったりうまく「あう」の意味からできた文字です。ここでも共通点が多いことが分かります。

ここで、ちょっと気取って、島崎藤村の「夜明け前」の一節を引用しておきます。

檜木（ひのき）、椹（さわら）、明檜（あすなろ）、高野槇（こうやまき）、鼠子（ねずこ）――これを木曾では五木（ごぼく）という。そういう樹木の生長する森林の方はことに山も深い。この地方には巣山（すやま）、留山（とめやま）、明山（あきやま）の区別があって、巣山と留山とは絶対に村民の立ち入ることを許されない森林地帯であり、明山のみが自由林とされていた。その明山でも、五木ばかりは許可なしに伐採することを禁じられていた。これは森林保護の精神より出たことは明らかで、木曾山を管理する尾張藩がそれほどこの地方から生まれて来る良い材木を重く視ていたのである。

日本の天然三大美林として「青森ヒバ・秋田スギ・木曽ヒノキ」が有名です。この中で、青森ヒバは中尊寺金色堂で、秋田スギは大館曲げ輪っぱで、それぞれ個性を発揮していますが、木曽五木も尾張藩絡みで、歴史的な興味を大いにそそる存在であることを知って欲しかったのです。それに、その昔、馬込・妻籠宿から奈良井宿までを歩いて、強烈な感傷と感動を感じたことを少しでもお伝えしたかったからです。

こうした針葉樹は、美しい花を咲かせるわけでもなく、まして花粉症の大きな原因ともなっていますから、あまり興味がないという人も多いかもしれません。しかし、最近は、その小さな若木がコニファーとして重用されているので思いの外身近で、シンボルツリーとしても大きな存在感を放っているものです。コニファーとは、庭木として楽しまれている針葉樹の総称です。

最後に、林業への敬意と愛情に溢れた映画として「WOOD JOB」をお勧めして筆をおくこととします。これは、三浦しをん著「神去なあなあ日常」を原作に、矢口監督が紡ぎ出す青春映画です。是非一度ご視聴になってみてください。ちょっぴり前向きになれること間違いなしです。

編集後記

このところ光が丘公園を散策することが多くなりました。すると、むっとするほどの、草いきれならぬ樹木から発散される何とも言えない熱気に、息苦しささえ感じることがあります。こういうときは、もう少し広い空間を、そう、自転車にでも乗って風を切りながら散歩したいものだと思います。

自転車と言えば、すぐに連想するのが高田渡の「自転車に乗って」です。誠に取るらない歌です。ただ、高校時代の私には、同じく他愛ない歌の代表、ドノヴァンの「僕の好きなシャツ」や遠藤賢司の「カレーライス」、古井戸の「さなえちゃん」とともに、無性に心に引っかかる歌ではありました。

当時は、ＰＰＭやブラザース・フォーの曲の方に親しんでいました。ですから、そういう耳に心地よくてどこか懐かしさを感じさせるのがフォークソングだと思いこんでいたので、その意味でも彼らの楽曲には異質な印象を受けたのでしょう。ちなみに、その頃一番好きだった曲はキャロル・キングの「君の友達」です。

当時を思うと、いろいろな出来事や感情、人間関係が交錯してきます。とりわけ高田渡の歌の場合は、故郷で何するともなく流されて無為に過ごしていた日々の思い出と重なって、どうも胸に痛みを伴います。

ところが、こうして齢を重ね、平凡でありふれた日常の価値や大切さに大きな意義を見出せるようになって、もう一度「自転車に乗って」を聞き直してみると、それまで気にもしていなかったバンジョーの軽快な響きがぐっと心に迫ってきます。それは懐かしさではなく、今を生きている喜びの息遣いに他